

第2章 共生への契機としての「“排除型社会”認識」

—学校と家庭における教育の可能性の探索—

桜井 淳平

1. はじめに

「共生」が、人々の思考や行動を無意識のうちに方向づける、求心力のあるプラスチック・ワードとなっているとの平田（2011）の指摘は、現在もなお、あてはまっているといっている。人々を啓蒙的に方向づける耳触りの良い語として、多文化共生施策や障害者施策をはじめとする様々な政策文書で多用され、日常語としても定着した感が強い。しかし他方で筆者が懸念するのは、その語感の良さゆえに、いまなお共生の問題が山積する現状が隠蔽され、ポジティブで無批判な現状認識が伝達されていないかという点である。

共生が要請される具体的局面・論題は、外国人、障害者、女性などといった社会的弱者・マイノリティのおかれた状況、彼らがうける差別的待遇の問題である。現代日本は、彼らにとって暮らしやすい社会となっているだろうか——。もちろん様々な改善はみられているが、例えば障害者差別解消法やヘイトスピーチ対策法にみられるように、総じて取り組みは緒に就いたところといえ、場合によっては逆行しているとみうけられる事案も日々散見される。社会的弱者がおかれている状況は未だ楽観的とはいえない。だが、楽観的な共生社会像も一方で提示されてきている。例えばテレビのバラエティ番組では、日本における多文化化が進行し、外国人が不自由なく暮らしている様が描かれたりする。またテレビドラマでは、元来は男性的とみなされてきた職業における女性の活躍や、障害をもった主人公の自己実現が描かれたりする（もちろんその過程での葛藤は描かれるが）。

とりわけ、これからの共生社会の担い手となりゆくことが期待される次世代の認識は、注目に値する。共生社会に関わる知識は、学校教育でも伝えられるようになっており、2008～09年の学習指導要領改訂を経て、学校教育の目標として「共に生きる力」が積極的に掲げられるようになった（岡本，2013）。このカリキュラムで学ぶ児童生徒は、いかなる共生社会認識をもち、社会的弱者がおかれている状況を理解しているだろうか。

共生の社会学において、社会的弱者のおかれている状況を変えていく鍵は、「あるもの」と「異なるもの」の関係性を対象化し、両者を隔てる社会的カテゴリを、現在のそれとは別なるものへと組み直すことにあるとされる（岡本，2016）。すなわち、日本人／外国人、健常者／障害者、男性／女性といった二分法のカテゴリの強固さにこそ、「異なるもの」としての社会的弱者の抱える困難の元凶がある。ゆえに、カテゴリとそれに付与される意味内容がなんら本質的でないことに気づき、その区分線をゆるやかに捉え、別なる認識枠組みへと更新していくことが共生へのプロセスとなる。「共生」の掛け声が、社会的弱者に共

感的でありながらも、実際の差別や格差の問題を曖昧にしたまま発せられていることもあるなかでは、「異なるもの」を自らの認識枠組みの範囲内で理解するのみでは共生には至らない（岡本，2011，p. 35）。この点で、社会的弱者がおかれている現在の困難性——いまだ社会的包摂には至らず、一定程度排除されている状況——に思いを馳せ、ネガティブな社会認識をもつことは、この難しい作業へのひとつの契機となりうるのではないかと考える。

以上をふまえ本稿では、中学生と高校生を対象にした共生社会意識調査の結果より、3つの課題を探究する。第一に、調査対象者が、社会的弱者の現在おかれている包摂／排除的状况をいかに認識しているのかを探索する（2節）。第二に、その認識が社会的カテゴリの更新に結びつくのかを探索する（3節）。第三に、社会的弱者に対するそのような認識を左右する背景要因を、家庭教育と学校教育にしばって探索する（4節）。

2. 「“排除型社会”認識」とその重要性

Q15には、日本社会の現状認識を尋ねる質問が14項目ある。そのなかで、一般に社会的弱者と名指される人々を、どの程度日本社会が包摂していると捉えているかを探索できる6つの質問を抜き出して用いよう。具体的には、「ある社会的弱者——女性、性的マイノリティ、障害者、若者、外国人、子育て中の人——が〇〇しやすい社会だ」という認識を問う質問に着目する。「そう思う」～「そう思わない」の4件法で尋ねた単純集計結果が表1である。「そう思う」という回答は、社会的弱者の包摂／排除状況をポジティブに認識し、「そう思わない」は逆にネガティブに認識しているとみなしうる。

表1 「社会的弱者が〇〇しやすい社会だ」という認識（N=1095／％）

	そう思う	まあ そう思う	あまり そう思わ ない	そう 思わない	無回答
1. 女性が働きやすい社会だ。	11.3	49.8	32.1	6.0	0.7
2. 性同一性障害や同性愛など、性的マイノリティ（少数者）の人が暮らしやすい社会だ。	2.7	19.1	52.0	25.5	0.7
3. 障害のある人が暮らしやすい社会だ。	5.8	37.9	45.2	10.6	0.5
5. 若者が暮らしやすい社会だ。	33.3	48.2	13.4	4.6	0.5
6. 外国人が暮らしやすい社会だ。	12.3	52.8	29.4	4.7	0.8
10. 子育てをしやすい社会だ。	7.6	37.0	43.7	11.1	0.7

簡単に回答傾向を概観しておこう。まず、若者の暮らしやすさについてが最も「そう思う」の回答が多くなっている（「そう思う」と「まあそう思う」の合計が81.5％）。これは、調査対象者がまだ自身で稼ぎを得る立場にないため、若者のおかれる経済的・労働条件的

な不安定性に直面していないことが関係しているかもしれない。それに次ぐ4項目は回答が割れている。「そう思う」と「まあそう思う」の合計が、外国人 65.1%，女性 61.1%，子育て中の人 44.6%，障害者 43.7%である。女性の働きやすさについてのポジティブな認識は、若者の項目と同様の解釈が成り立つと思われる。最後に、性的マイノリティが最も「そう思う」と回答されない（合計が21.8%）。身近に困難をイメージしやすい存在が立ち現れているということだろうか。テレビドラマ等で困難が描写される機会が増しているからであろうか。

表2 「共生社会」という言葉の認知 × 「社会的弱者が〇〇しやすい社会だ」

「共生社会」という言葉を…	女性が働きやすい社会		「共生社会」という言葉を…	性的マイノリティ(少数者)の人が暮らしやすい社会	
	そう思う群	そう思わない群		そう思う群	そう思わない群
聞いたことがあり、意味も知っている(n=285)	度数 154 % 54.0%	131 46.0%	聞いたことがあり、意味も知っている(n=285)	度数 58 % 20.4%	227 79.6%
聞いたことはあるが、意味は知らない(n=557)	度数 362 % 65.0%	195 35.0%	聞いたことはあるが、意味は知らない(n=556)	度数 129 % 23.2%	427 76.8%
聞いたことがない(n=236)	度数 146 % 61.9%	90 38.1%	聞いたことがない(n=237)	度数 50 % 21.1%	187 78.9%
$\chi^2(2) = 9.487, p = 0.008 (<.01)$			$\chi^2(2) = 1.032, p = 0.597 (n.s.)$		
「共生社会」という言葉を…	障害のある人が暮らしやすい社会		「共生社会」という言葉を…	若者が働きやすい社会	
	そう思う群	そう思わない群		そう思う群	そう思わない群
聞いたことがあり、意味も知っている(n=286)	度数 125 % 43.7%	161 56.3%	聞いたことがあり、意味も知っている(n=285)	度数 221 % 77.5%	64 22.5%
聞いたことはあるが、意味は知らない(n=556)	度数 257 % 46.2%	299 53.8%	聞いたことはあるが、意味は知らない(n=557)	度数 471 % 84.6%	86 15.4%
聞いたことがない(n=238)	度数 92 % 38.7%	146 61.3%	聞いたことがない(n=239)	度数 194 % 81.2%	45 18.8%
$\chi^2(2) = 3.881, p = 0.142 (n.s.)$			$\chi^2(2) = 6.407, p = 0.041 (<.05)$		
「共生社会」という言葉を…	外国人が暮らしやすい社会		「共生社会」という言葉を…	子育てしやすい社会	
	そう思う群	そう思わない群		そう思う群	そう思わない群
聞いたことがあり、意味も知っている(n=285)	度数 175 % 61.4%	110 38.6%	聞いたことがあり、意味も知っている(n=284)	度数 111 % 39.1%	173 60.9%
聞いたことはあるが、意味は知らない(n=554)	度数 382 % 69.0%	172 31.0%	聞いたことはあるが、意味は知らない(n=557)	度数 262 % 47.1%	294 52.9%
聞いたことがない(n=238)	度数 151 % 63.4%	87 36.6%	聞いたことがない(n=239)	度数 110 % 46.2%	128 53.8%
$\chi^2(2) = 5.475, p = 0.065 (<.1)$			$\chi^2(2) = 5.158, p = 0.076 (<.1)$		

※「そう思う群」は「そう思う」と「まあそう思う」の合計、「そう思わない群」は「あまりそう思わない」と「そう思わない」の合計

では、「そう思う」／「そう思わない」という回答はそれぞれ何を意味するのだろうか。どのような思考がその回答を導くのだろうか。この点を探索してみたい。表2では以上の6項目について、「共生社会」という言葉をどの程度知っているのかどうかとの関連をみた。「そう思う」の%を比較するとほぼ共通した傾向をもっているといえ、総括的な知見として引き出せるのは、次の諸点である。「共生社会」という言葉を「聞いたことがあり、意味も知っている」場合で、「そう思う群」——社会的弱者の包摂／排除へのポジティブな認識——が最も低くなる（例えば女性の項目で54.0%）。「言葉は知っているが、意味は知らない」で、「そう思う群」が最も高くなる（女性の項目で65.0%）。「聞いたことがない」で再

び「そう思う群」は増加する（女性の項目で 61.9%）。ここから推察されることは第一に、「共生社会」という言葉を意味内容まで理解することで、社会的弱者がいまなお排除されている側面があるところに目が留まる。第二に、言葉を知っている程度の理解ではかえって、日本社会が彼らを包摂できているポジティブな状況のみが伝達される。第三に、言葉自体を聞いたことがないと逆にそのポジティブな認識にもつながらない。以上の点である。

いま少し詳細にみておく。上述の傾向が顕著なのは女性、外国人、若者、子育て中の人のおかれている状況に関してである。「そう思わない群」の回答を、「意味も知っている」場合と「意味は知らない」場合で比較する。女性については 46.0%と 35.0%で、「意味も知っている」場合のほうが 9.0 ポイントの差でネガティブな認識に傾いている。いまなお男女で賃金格差があることや、管理職の男女の比率に差があることなどは、共生の含意するところとは遠いと認識されていることが推察される。同様に、外国人については 38.6%と 31.0%で 7.6 ポイント差、若者については 22.5%と 15.4%で 7.1 ポイント差、子育て中の人については 60.9%と 52.9%で 8.0 ポイント差が確認でき、「意味も知っている」場合のほうがネガティブな認識に傾く。共生社会の意味するところを理解することで、日本社会に居住しながら様々な権利が認められていない外国人、若者世代と高齢者世代の経済格差の問題などが共生社会を脅かす問題として把握され、彼らが包摂されていない現状に目が留まると考えられる。

以上をふまえ、「社会的弱者が〇〇しやすい社会だ」という問いに「そう思わない」と回答することが共生志向性を有す点で重要である、と本稿では捉えたい。そしてこの認識を、社会的弱者がいまなお排除されている側面へセンシティブであることを含意し、「“排除型社会”認識」と名づけておく。これは、近代から後期近代への移行を包摂型社会から排除型社会への移行として捉え、黒人・アンダークラス・麻薬常習者などのコミュニティで弱い立場におかれた人々が忌み嫌われ、犯罪者予備軍として排除される傾向が強まる今日の社会状況を論及した、ヤング（Young 訳書、2007）の知見および主著のタイトルになっている。次節では、この認識が社会的カテゴリの更新に結びつくのかを探索する。

3. 「“排除型社会”認識」は社会的カテゴリの更新に結びつくか——「子育て“しにくい”社会だ」という認識とジェンダー・イメージの関連を中心に

先述したように、スローガンのような言明としての共生ではなく、自足的ではないかたちで「異なるもの」を対象化する共生へと歩みを進めるために重要なのが、社会的カテゴリの組み直し・更新である。現代中高生が社会的カテゴリをどの程度強固に／ゆるやかに捉えているのか、本稿では試みに男性／女性という区分に焦点化し、探索していく。現代日本社会には、男性がする・得意であるとイメージされるモノ・コトと女性がする・得意であるとイメージされるモノ・コトがある。それは、社会学的には社会的な性（ジェンダー）と称され、構築されたイメージとみなされるが、一般的には「看護婦はもともと女性がな

るもの」などと本質主義的に解されていることも多い。そのような発想ではなく看護師に両方の性をイメージするかどうか、すなわち固定的・排他的なジェンダー・イメージを飛び越えているかどうか、その現状をまずは探っていきたい。

Q20 では、ある言葉からイメージするのが男性か女性かを、「男性をイメージする」～「男性と女性の両方をイメージする」～「女性をイメージする」の5件法で尋ねている。15項目のなかから、中高生の将来設計に関わりが深そうな、職業と家庭生活に関する6項目についてみていく（表3）。

まず職業に関する言葉について。看護師は2002年の名称変更からある程度の時が経過しているが、「女性をイメージする」が54.8%となっているようにまだ「婦」のイメージが強いようである。対照的に医師は、女性のイメージにはならないものの、「両方をイメージする」が35.9%となりジェンダー・イメージの強さが緩和されてきている。「女医」がテレビメディアに多く登場していることが影響していると考えられる。また校長先生は、「どちらかといえば男性」を挟んで「男性をイメージする」（34.0%）と「両方をイメージする」（42.1%）で割れている。学校経験における女性校長の存在が関係して両極端になるのかもしれない。

つづいて家庭生活に関する言葉について。こちらは「イクメン」が称揚されている動向を中高生も察知しているか、いずれの項目もステレオタイプなイメージに集中せず、「両方をイメージする」へ回答が流れている。とりわけ、「料理をする」は「両方」が52.9%と特筆すべきであり、ジェンダー障壁の乗り越えはまず家事から進んでいるといえそうである。それと比べると、「夫が稼ぐ・妻が育児をする」という役割分担イメージはまだ残存しているとみなせる。

表3 職業と家庭生活に関するジェンダー・イメージ (N=1095/%)

	男性をイメージする	どちらかといえば男性をイメージする	男性と女性の両方をイメージする	どちらかといえば女性をイメージする	女性をイメージする	無回答
◆職業に関する言葉のイメージ						
3. 看護師	0.5	0.9	14.8	28.4	54.8	0.6
7. 医師	29.9	31.4	35.9	1.0	1.2	0.6
13. 校長先生	34.0	21.5	42.1	1.2	0.8	0.5
◆家庭生活に関する言葉のイメージ						
5. 料理をする	1.0	1.2	52.9	24.1	20.5	0.3
11. 家族をお金の面で支える	33.5	27.3	32.8	2.3	3.6	0.5
14. 子育てをする	0.5	0.7	34.1	29.0	35.3	0.4

さて、ここで示したようなジェンダー・イメージの差——ステレオタイプなイメージを

もちつづけるか、それを相対化するか——は何に左右されるのだろうか。本稿では、前節でみた「“排除型社会”認識」が関連するのではないかとの仮説をもっている。そこで、まずは試みにジェンダー・イメージと関係する「子育てしやすい社会だ」の質問項目を説明変数として使用する。被説明変数は、従来から一般的にイメージされる側の「男性／女性をイメージする」と「どちらかといえば」をまとめて【ステレオタイプ】とし、「両方をイメージする」を含めたそれ以外を【脱ステレオタイプ】とした2群を準備する。6項目についてクロス集計を行ったのが表4である。

ここからわかるように、全項目で「子育てしやすい社会だ」でそう思わない群のほうが【脱ステレオタイプ】のパーセンテージが高まる結果となっている。要するに、「子育て“しにくい”社会」になっていることに目が留まっている場合、職業や家庭生活に関する言葉に付与される男性／女性イメージが相対化され、固定的なものとは捉えなくなる。これは、「ジェンダー・イメージの強固さが子育てしにくさの源泉のひとつである」との考えに至っていることを必ずしも意味しないが、その萌芽となりうる。

表4 「子育てしやすい社会だ」への認識 × ジェンダー・イメージ

◆職業に関する言葉のイメージ

		看護師	
		「男性をイメージ」 + 「両方をイメージ」 【脱ステレオタイプ】	「女性をイメージ」 【ステレオタイプ】
「子育てしやすい社会だ」…			
そう思う群 (n=483)	度数 %	70 14.5%	413 85.5%
そう思わない群 (n=597)	度数 %	106 17.8%	491 82.2%

$\chi^2(1) = 2.084, p = 0.149 (n.s.)$

◆家庭生活に関する言葉のイメージ

		料理をする	
		「男性をイメージ」 + 「両方をイメージ」 【脱ステレオタイプ】	「女性をイメージ」 【ステレオタイプ】
「子育てしやすい社会だ」…			
そう思う群 (n=487)	度数 %	256 52.6%	231 47.4%
そう思わない群 (n=597)	度数 %	341 57.1%	256 42.9%

$\chi^2(1) = 2.246, p = 0.134 (n.s.)$

		医者	
		「男性をイメージ」 【ステレオタイプ】	「女性をイメージ」 + 「両方をイメージ」 【脱ステレオタイプ】
「子育てしやすい社会だ」…			
そう思う群 (n=485)	度数 %	320 66.0%	165 34.0%
そう思わない群 (n=595)	度数 %	347 58.3%	248 41.7%

$\chi^2(1) = 6.639, p = 0.010 (<.05)$

		家族をお金の面で支える	
		「男性をイメージ」 【ステレオタイプ】	「女性をイメージ」 + 「両方をイメージ」 【脱ステレオタイプ】
「子育てしやすい社会だ」…			
そう思う群 (n=485)	度数 %	308 63.5%	177 36.5%
そう思わない群 (n=596)	度数 %	354 59.4%	242 40.6%

$\chi^2(1) = 1.902, p = 0.168 (n.s.)$

		校長先生	
		「男性をイメージ」 【ステレオタイプ】	「女性をイメージ」 + 「両方をイメージ」 【脱ステレオタイプ】
「子育てしやすい社会だ」…			
そう思う群 (n=487)	度数 %	294 60.4%	193 39.6%
そう思わない群 (n=595)	度数 %	308 51.8%	287 48.2%

$\chi^2(1) = 8.034, p = 0.005 (<.01)$

		子育てをする	
		「男性をイメージ」 + 「両方をイメージ」 【脱ステレオタイプ】	「女性をイメージ」 【ステレオタイプ】
「子育てしやすい社会だ」…			
そう思う群 (n=487)	度数 %	156 32.0%	331 68.0%
そう思わない群 (n=596)	度数 %	228 38.3%	368 61.7%

$\chi^2(1) = 4.534, p = 0.033 (<.05)$

※「そう思う群」は「そう思う」と「まあそう思う」の合計、「そう思わない群」は「あまりそう思わない」と「そう思わない」の合計

※「男性／女性をイメージ」には「どちらかといえば男性／女性をイメージ」を含む

うち、5%水準で有意となっているのは次の3項目である。医師の【脱ステレオタイプ】を比べると、そう思う群は34.0%でそう思わない群は41.7%となる ($p < .05$)。校長先生では、そう思う群が39.6%、そう思わない群が48.2%である ($p < .01$)。元来は男性イメージの強い職業で、関連が強くなっている。中高生にとって「子育てしやすさ」は、女性の仕事と家庭の両立をめぐる問題とやや限定的に捉えられているのかもしれない。それゆえ、一定の職業がまだ女性に拓けていないことに対する問題意識が強くなると推察できる。逆にいえば、看護師であまり差がみられないのは、女性イメージの強い職業に就けない男性の困難性があまり想起されていないことの現れともみなせる。

また、子育てしやすい社会だと思わない群で、子育てをするジェンダー・イメージが相対化されるという点は、最も意味を読み取りやすく重要である。それは、子育ての困難の源泉に子育て行為が女性に偏在している問題がある、という図式で捉えられている可能性を示唆するからである。

ここでは職業と家庭生活に関する6項目に限定してみたが、他の項目も含めたジェンダー・イメージ全体を取り上げても、差はみられるだろうか。そこで、Q20の15項目において「両方をイメージする」と回答した数を足し合わせ、得点化した。「両方をイメージする」へ回答することとは、その言葉のイメージを男性/女性という固定的なものではなく「どちらでもありえる」と捉えているということであり、流動的かつ中立的な視座を有している点で意味をもつ。得点は0~15のレンジをもつ値で、この平均値を「子育てしやすい社会だ」と思うか思わないかで比較する。

t 検定の結果は表5に示されている。「両方をイメージする」への回答数(得点)は、そう思わない群のほうが平均値で0.86上回り、0.1%水準で有意である。そして効果量(Cohen's d)が.23となっていることから、大きいとはいえないが意味のある平均値の差になっていると判断できる。すなわち、子育てのしにくい社会であることにセンシティブであることは、より包括的なジェンダー・イメージの相対化に結びつく。

表5 「子育てしやすい社会だ」への認識で比較した、
男性/女性の「両方をイメージする」得点の平均値

「両方をイメージする」への回答数(得点)

「子育てしやすい社会だ」	n	平均値	標準偏差	t 値	p 値	Cohen's d
そう思う群	477	4.34	3.116	-3.763	.000	.23
そう思わない群	587	5.10	3.457			

※「そう思う群」は「そう思う」と「まあそう思う」の合計、「そう思わない群」は「あまりそう思わない」と「そう思わない」の合計

では、同様のことが若者/高齢者イメージでも確認できるだろうか。補足的に検証する。Q21はジェンダー・イメージを主題化したQ20と同様に、ある言葉からイメージするのが若

者か高齢者かを5件法で15項目尋ねている。職業に関する3項目について、従来のイメージのサイドをまとめて【ステレオタイプ】とし、「両方をイメージする」を含めたそれ以外を【脱ステレオタイプ】とした2群を準備し、被説明変数とした。説明変数は「若者が暮らしやすい社会だ」への認識を使用する。クロス集計の結果が表6である。ITエンジニアと農家では、そう思わない群のほうが【脱ステレオタイプ】へ回答が傾くという関連がみられ、10%水準で有意である。もともとのイメージが若者であれ高齢者であれ、若者の暮らしにくい社会を敏感に感じ取っている人は、イメージをゆるやかに捉える傾向にはある。ただし政治家については関連がみられず、また表7に示すように、「両方をイメージする」の回答数を足し合わせた得点の平均値を比較する t 検定を行っても、有意な差までは至らなかった（効果量の点でも意味のある差にはなっていない）。ジェンダー・イメージよりも若者と高齢者のイメージは、強固な社会的合意が残存するものと推測される。

表6 「若者が暮らしやすい社会だ」への認識 × 若者／高齢者イメージ

◆職業に関する言葉のイメージ

「若者が暮らしやすい社会だ」…	ITエンジニア			「若者が暮らしやすい社会だ」…	農家	
	「若者をイメージ」 【ステレオタイプ】	「高齢者をイメージ」 + 「両方をイメージ」 【脱ステレオタイプ】			「若者をイメージ」 + 「両方をイメージ」 【脱ステレオタイプ】	「高齢者をイメージ」 【ステレオタイプ】
そう思う群 ($n=883$)	度数 792 % 89.7%	91 10.3%		そう思う群 ($n=888$)	度数 159 % 17.9%	729 82.1%
そう思わない群 ($n=192$)	度数 163 % 84.9%	29 15.1%		そう思わない群 ($n=194$)	度数 46 % 23.7%	148 76.3%

$\chi^2(1) = 3.662, p = 0.056 (<.1)$

$\chi^2(1) = 3.495, p = 0.062 (<.1)$

「若者が暮らしやすい社会だ」…	政治家	
	「若者をイメージ」 + 「両方をイメージ」 【脱ステレオタイプ】	「高齢者をイメージ」 【ステレオタイプ】
そう思う群 ($n=889$)	度数 274 % 30.8%	615 69.2%
そう思わない群 ($n=193$)	度数 56 % 29.0%	137 71.0%

$\chi^2(1) = 0.244, p = 0.621 (n.s.)$

※「そう思う群」は「そう思う」と「まあそう思う」の合計、「そう思わない群」は「あまりそう思わない」と「そう思わない」の合計

※「若者／高齢者をイメージする」には「どちらかといえば若者／高齢者をイメージする」を含む

表7 「若者が暮らしやすい社会だ」への認識で比較した

若者／高齢者の「両方をイメージする」得点の平均値

「両方をイメージする」への回答数(得点)

「若者が暮らしやすい社会だ」	n	平均値	標準偏差	t 値	p 値	Cohen's d
そう思う群	866	3.53	2.912	-1.621	.106	.14
そう思わない群	181	3.96	3.324			

※「そう思う群」は「そう思う」と「まあそう思う」の合計、「そう思わない群」は「あまりそう思わない」と「そう思わない」の合計

4. 「排除型社会」認識の背景要因——学校教育・家庭教育環境との関連

前節までで明らかにしたように、共生という観点からみて「排除型社会」認識は重要性を帯びている。そこで本稿の最後に、その認識の強弱が何に左右されるか、その背景要因を回帰分析により探索する。被説明変数は、表1でみた「社会的弱者が〇〇しやすい社会だ」に係る6項目を合成した変数である。これらは、「そう思わない」という回答にこそ意味があった。そこで、「そう思う」を1、「まあそう思う」を2、「あまりそう思わない」を3、「そう思わない」を4とし、合計した得点——「排除型社会」認識得点——を使用する。最高24点～最低6点で、高いほど社会的弱者の不自由な生活、排除的境遇に敏感に感じとっている。一方説明変数は、一覧を表8に示す。子どもが対象であることから、学校と家庭における教育の働きに焦点化し、共生を教育する局面の検討につなげられるようにする。

表8 分析に使用する説明変数の一覧

(1) 性別 (F1_B) : 「男性」を1, 「女性」を0。
(2) 学校段階 (F1_A) : 「高校」を1, 「中学」を0。
(3) 好きな授業 (Q1) : 回答有が1, 無が0。なお①社会科は、中学生の場合は「社会」、高校生の場合は「地理・歴史」「公民」のいずれかに回答があること示す。
(4) 授業理解度 (Q2) : 「わかる」が4～「わからない」が1にリコード。
(5) 好きな学び方 (Q3) : 回答有が1, 無が0。③板書中心は「黒板の前で先生が説明してくれる授業」のこと。
(6) 家の新聞購読の有無 (Q4) : 「とっている」が1, 「とっていない」が0。
(7) 家族内の会話・話題 (Q5_2～5, Q6_1～2) : ①～④は「とてもよくあてはまる」が4～「あてはまらない」が1でリコード。⑤～⑥は「よくある」が4～「ほとんどない」が1でリコード。
(8) 「共生社会」という言葉の認知 (Q19) : 「意味も知っている」「聞いたことはあるが意味はわからない」「言葉を聞いたことがない」の3カテゴリ。基準カテゴリを「聞いたことはあるが意味はわからない」とし、2つのダミー変数を作成。

重回帰分析の結果を表9に示す。モデルの決定係数が高くないため、ここで挙げた説明変数以外で説明される部分が多々あることに留意しつつ、参考になる結果を読みとってこよう。第一に基本属性との関連について——(1)(2)。男子よりも女子のほうが、中学生よりも高校生のほうが、有意に「排除型社会」認識得点が高くなる。

第二に学校教育との関連について——(3)～(5)。好きな授業との有意な関連はなかったが、好きな学び方との関連は確認された。調べ学習は、問題解決学習という位置づけから直感的に「排除型社会」認識得点が高くなると筆者は推測したが、逆の結果だった。「調べ学習が好き」とは社会問題への気づきとは若干方向性が異なっているのかもしれない。一方、「発表が好き」の場合は「排除型社会」認識得点に有意に高くなる。調べる

作業から一步考えを深め、意見を表明することに楽しみを感じる事が、社会的弱者の境遇へセンシティブであろうとすることと軌を一にすると考えられる。

第三に、家庭教育との関連について——(6)(7)。家族でいかなる媒体を通じた話をするかという点では、本や雑誌・テレビ番組・新聞記事について話をする事とは有意に関連はみられないが、ネットで見たことについて話をする事とは有意に負の関連が確認できる。社会的弱者の生活しにくさへの気づきを与えるような言説はネットにはあまりみられず、高(2015)がGoogleやTwitterなどのインターネット上でのレイシズムの興隆に迫っているように、逆に排他的語りを目にする機会が増すメディアとなっていると推測できよう。特筆すべきは、話の内容によって真逆の結果が出ている点である。自分の住んでいる町について話をする事は「「排除型社会」認識得点」と有意に負の関連を示し、逆に政治や社会の問題について話をする事とは有意に正の関連をもつ。すなわち、マイクロ・ローカルな文脈の話題は社会的弱者への排他的状況への気づきには結びつかず、包摂的に認識される一方、ローカルな文脈を離れたマクロな話を重ねることはその気づきに結びつくことになる。推測するに、マイクロ・ローカルな範囲では社会的弱者の存在があまり認識されていない可能性がある。政治・社会の問題というマクロな水準で話をしてはじめて、気づきが得られるものだと考えられる。

表9 「「排除型社会」認識」の背景要因(重回帰分析の結果/N=1095)

	弱者排除認識得点		
	β	VIF	
(1)性別:男性ダミー	-.073 *	1.111	
(2)学校段階:高校ダミー	.087 **	1.137	
(3)好きな授業	①社会科	-.008	1.108
	②「総合的な学習の時間」	.006	1.048
(4)授業理解度	-.055	1.124	
(5)好きな学び方	①調べ学習	-.066 *	1.105
	②発表	.071 *	1.086
	③板書中心	-.026	1.048
(6)家で新聞をとっている	-.024	1.185	
(7)家族での話題	①読んだ本や雑誌	.037	1.849
	②テレビ番組	-.074	1.572
	③新聞の記事	.026	1.872
	④ネット	-.085 *	1.609
	⑤自分の住んでいる町	-.156 ***	1.500
	⑥政治や社会の問題	.135 **	1.847
(8)「共生社会」という言葉の認知 (「聞いたことはあるが意味はわからない」に対して…)	「意味も知っている」	.097 **	1.200
	「言葉を聞いたことがない」	.049	1.187
(定数)		***	
調整済みR ² 値		.049	
F値(有意確率)		4.131(.000)	

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

第四に「共生社会」という言葉の認知との関連をみると、「意味も知っている」ことが有意に「排除型社会」認識得点を高める。これは2節で明らかにしたことを追認しているといえ、言葉を聞くだけの段階から意味まで知る段階への到達が特に大切であるといえる。

5. おわりに

本稿では、「排除型社会」認識が「共生社会」という言葉の認知と関連をもつことを示すことで、共生志向性をもつ重要な認識であることへの気づきを得て（2節）、「子育て“しにくい”社会だ」という認識とジェンダー・イメージの関連を例に、「排除型社会」認識が社会的カテゴリの更新に一定程度結びつくことを明らかにした（3節）。そして、「排除型社会」認識の背景要因としていくつか指摘しうが、学校教育の枠組みでは調べ学習ではなく発表が好きであること、家庭教育の枠組みではマイクロでローカルな文脈ではなくローカルな文脈を離れたマクロな会話をすることが、認識の強弱への分水嶺となることを示した（4節）。以上より、共生への契機としての「排除型社会」認識の一端を明らかにした。

まずは学校や家庭においてマクロな水準での「共生社会」への理解を進め、考え、意見を表明することを重ねていくことが、社会的弱者がいまなお排除的境遇におかれていることにセンシティブになりゆく、端緒となるだろう。そして、その排除的境遇の背景に既存の社会的カテゴリの強固さを見だし、カテゴリを更新していく志向性は、そこから紡がれていくことになる。むしろその流れは単線的ではないが、社会的カテゴリの更新という難儀な営みに迫るための共生教育の起点は、こうしたところにあるのではないだろうか。

表 10 「排除型社会」認識得点（2群）× 日本社会への貢献の意欲

弱者排除認識得点		何らかのかたちで日本の社会に貢献すること				無回答
		ぜひやってみよう	できればやってみよう	あまりやってみたくない	まったくやってみたくない	
低群:6~14点 (n=529)	度数	205	257	53	11	3
	%	38.8%	48.6%	10.0%	2.1%	0.6%
高群:15~24点 (n=547)	度数	206	255	56	27	3
	%	37.7%	46.6%	10.2%	4.9%	0.5%

ただ、本稿が主題とした「排除型社会」認識について、留意しておくべきことがひとつある。それは、この認識は必ずしも、社会的弱者の生活しにくさを改善していく具体的な意欲、さらにはアクションに結びつくわけではなさそうである、という点である。表 10 では、「排除型社会」認識得点をその分布からほぼ同数になるように低群／高群に分けたものと、「何らかのかたちで日本の社会に貢献すること」(Q17_1)への意欲の関連をクロス集計した。「ぜひやってみよう」が38.8%と37.7%となっているように、差はほぼない。だがこれによって「排除型社会」認識を過小評価するのは早計である。人々の認識の集

積としての社会構造が、社会的弱者の生きづらさを導いている以上、認識を改めていくことに希望はある。個々の認識の変容もまた社会構造を少しずつ変えていくのであるから、小さなところから始めるしかない。

【注記】

- 1) 「“排除型社会”認識」が強いと貢献意欲が低くなるという、逆の有意な関連がみられなかった点では、同認識の強い人がある種のシニシズムに陥っている可能性は低そうである。この点で、「社会的弱者が〇〇しやすい社会だ」に「そう思わない」と回答することに意義を与える本稿の基盤が崩されることは、なかったといえよう。

【文献】

- 平田諭治, 2011, 「忘れられた『共生』の語り——〈植民地帝国日本〉というミッシング・リンク」岡本智周・田中統治編著, 『共生と希望の教育学』筑波大学出版会, pp. 42-55.
- 岡本智周, 2011, 「個人化社会で要請される〈共に生きる力〉」岡本智周・田中統治編著, 前掲書, pp. 30-41.
- , 2013, 『共生社会とナショナルヒストリー——歴史教科書の視点から』勁草書房。
- 岡本智周・丹治恭子編, 2016, 『共生の社会学——ナショナリズム, ケア, 世代, 社会意識』太郎次郎社エディタス。
- 高史明, 2015, 『レイシズムを解剖する——在日コリアンへの偏見とインターネット』勁草書房。
- Young, Jock, 1999, *The Exclusive Society: Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity*, SAGE Publication (=2007 青木秀男・伊藤泰郎ほか訳 『排除型社会——後期近代における犯罪・雇用・差異』洛北出版)。